

地域畜産振興部門

岡山県真庭市

蒜山酪農農業協同組合

(代表：代表理事組合長 長綱元昭)

日本一のジャージー牛産地の 育成と6次産業化への取り組み



組合幹部の方々

岡山県の蒜山地域は、昭和 29 年に当時の三木知事の「乳の流れる里」作りに呼応して、わが国で初めてジャージー牛が導入された。積雪寒冷地であるため、米以外の農業がほとんどなかった地域であるため、ジャージー牛の導入は画期的なことであった。蒜山酪農農業協同組合は、ジャージー牛導入とあわせて設立され、大手メーカーでは受け入れられなかったジャージー牛乳を独自に処理し、販売する機能を担った。また、その後も関係機関と連携し、ジャージー牛振興のための多くの振興活動に取り組み、日本一のジャージー牛産地を育成した。

組合の特徴的な活動の第 1 としては、生産振興の実施である。

①近年の乳価低迷のなかで生産量を増加させるために奨励金制度を設置し、販売乳価に奨励金を上乗せし、ホルスタイン牛乳に比べて約 2～3 割高の乳価を実現している。このことで組合員の生産意欲と生産量の向上に貢献してきた。

②組合員から子牛を買い取り、育成牧場で放牧・育成して組合員に販売する事業にも取り組んでおり、組合員の育成牛飼養管理からの解放と優良牛供給を担っている。また、副産物である F₁ 子牛を組合員から肥育もと牛用に購入し、肥育して販売している。

③乳質改善・衛生環境の改善による高品質牛乳の生産である。「牛は草食動物である」のコンセプトに基づき、組合員の飼料自給率の向上を推進し、良質草種への転換を指導している。この結果、粗飼料（牧草類）多給型の飼育管理により黄色度の高いジャージー牛乳本来の牛乳が生産され、高品質な加工乳製品の生産につながっている。また、乳質向上や牛舎環境を改善するために、組合の役職員と組合員が調査チームを編成し、牛体の衛生管理、飼養管理、牛舎内の環境実態等を年 3 回調査し、評価している。

第 2 はオンリーワンの商品開発と販路開拓及び安心・安全のマーケティング戦略の展開である。

①ジャージー牛乳の価値を高めるため、組合独自でプラントを設置し、牛乳処理とジャージー牛乳のみを原料とした各種乳製品作りに取り組んできた。さらにジャージー牛の精肉や肉加工品を開発するなど、全国に先駆けて 6 次産業化の取り組みを行ってきた。

②組合直営のレストランで組合生産物を利用した料理を提供し、乳製品の販売を通して消費者の生の声の把握にも努めている。

③消費者の求める安全・安心に目に見える形で対応するために、平成 16 年の市乳工場完成と同時に、HACCP やトレーサビリティシステムを導入し、インターネットで公開している。

第 3 に産地の維持・発展による地域農業の活性化と産業経済への貢献である。

①組合の指導による飼料自給率の向上は、地域の遊休農地の増加の歯止めとなっている。

②「蒜山三座を背に悠然と草をはむジャージー牛」の光景は、蒜山地域でしか見られない景観を形成することで県内有数の観光地の維持・発展に貢献している。

③観光客の乳肉加工施設の見学や加工体験、育成牧場や組合員のふれあいイベントの開催等、「食と食農教育」を意識した取り組みを積極的に展開している。

④乳肉加工施設、レストラン等の運営により、農業以外の他産業が少ない地域に雇用を創出している。

以上のように、組合員の生産活動に対する支援のみならず、組合員の生産物を最大限に生かした 6 次産業化の取り組みを実践することで、全国のジャージー牛の 1/3 が飼養される日本一のジャージー牛の産地に育て上げた。発展の礎は蒜山酪農農業協同組合であり、組合の生産から販売まで「ジャージー牛にこだわった一貫した活動」が貢献してのものである。

▼ジャージー牛

蒜山地域では、ジャージー牛を先駆的に導入し改良を重ねてきた



▼放牧場

山麓に広がる約40haの放牧場



▼育成牛

組合員から子牛を買い上げ、組合で育成後に希望する組合員へ販売



▼ゲストハウス

蒜山ジャージーランド内のゲストハウス



▼牛乳・乳製品

組合で生産されている牛乳・乳製品等



▼商品紹介のPOP

商品を理解してもらった上で購入してもらうため商品の特性などを手書きのPOPで紹介

